

斎藤報恩会と狩野文庫

曾根原 理

はじめに

斎藤報恩会は、宮城県桃生郡前谷地（現石巻市）の大地主・実業家であった9代目斎藤善右衛門有成（1854-1925）が、天から授かった財は社会に還元するべきであるという信念にもとづき、大正12年（1923）2月20日に設立した財団である。投じられた私財300万円は、当時あっては大金であったが（現在の貨幣価値に換算すると27億円前後ともいわれる）、その大半が学術研究助成に向けられ、加えて産業振興や社会事業にも宛てられた。学術研究助成の中では、東北帝国大学の自然科学分野の研究がもっとも恩恵を蒙ったが、文科系の研究や、東北帝国大学以外の東北地方の研究者に対しても、少なからざる援助が与えられた¹。

第二次世界大戦前後には、空襲や進駐軍への対応などのため活動を縮小し、さらに財団資金の減少により、最終的には2015年（平成27）9月、財団は解散した。所蔵していた資料等については、郷土資料の大半が仙台市博物館、自然史資料が仙台市科学館、報恩会の活動に関わる資料は東北大学史料館に寄贈された²。2016年（平成28）秋には、東北大学史料館と仙台市博物館で、寄贈された資料を中心とする記念展示が実施され、改

めて同会の活動の歴史的意義が見直される機会となった³。

筆者は史料館の展示スタッフの一員として、主に人文科学系の学術研究助成について、調査を担当した。その際に、東北大学附属図書館が誇る貴重書群—ヴェント文庫、スタイン文庫、チーテルマン文庫、西藏大蔵経、秋田家史料—などが、斎藤報恩会の助成金により購入されたことを知り、その恩恵の大きさに驚かされた。また、東北帝国大学の蔵書群に加わる予定で遙か欧州から日本に無事到着しながら、関東大震災のため横浜港で焼失し仙台の地に至ることが出来なかったデルボー文庫の存在を知るようになった⁴。

こうした貴重書群の一角と考えられてきたのが、狩野文庫の洋書である。東北帝国大学の狩野文庫のうち洋書についても、斎藤報恩会の学術支援で購入されたと考えられていた⁵。しかし後述のように、検討を要する。

本稿では、東北帝国大学が狩野文庫を購入するにあたり吉野作造⁶が仲介した事実を示し、また購入された洋書のその後について、調査した結果を明らかにするものである。

1. 吉野作造と狩野亨吉

管見の限り、東北帝国大学が狩野文庫を入手した際に、吉野作造の介在が指摘されたことは無い。たとえ

ば第3代図書館長の村岡典嗣（在任：1929～1937）が記した「狩野文庫概説」には、同文庫が3回に分けて

-
- 1 斎藤報恩会についての概括的な理解には、『財団法人斎藤報恩会のあゆみ—財団85年・博物館75年』（同会発行、2009年）が便利である。
 - 2 菅野正道「斎藤報恩会の解散」（『仙台郷土研究』復刊41-1、2016年）。
 - 3 史料館における展示については、曾根原理・永田英明・村上麻祐子「展示記録 学都仙台を支えた「天財」—斎藤報恩会と東北大学—」（『東北大学史料館紀要』12、2017年）参照。
 - 4 伊木武雄「大学図書館の三十年（二）」（『同心』〈東北大学附属図書館同心編集部〉1949年8月）は、「仏法関係の特別集書にデルボー文庫なるものがあるが、これは荷揚げ直前関東震災に会って横浜の海中に沈み、今本館に残るのはそのカタログ丈けであるという痛恨事もあった」と記す。しかし斎藤報恩会の大正13年6月3日付文書（『大正13年度 執務文書』）に「デルボー文庫ハ横浜税関在庫中震災ノ為メ焼失」とあり、沈没ではなく焼失と考えられる。米澤晋彦・吉葉恭行「財団法人による研究助成の実際—戦前の斎藤報恩会を事例として—」（『東北大学史料館紀要』5、2010年）p.24参照。
 - 5 前掲『財団法人斎藤報恩会のあゆみ』p.29など。
 - 6 1878-1933、宮城県出身の政治学者。大正デモクラシーの中心人物の1人として民本主義を主張した。1909-1924年は東京帝国大学の教員。

納入されたことが記される。すなわち①大正元年(1912) 貴族院議員荒井泰治氏の寄附による購入、②大正12年(1923) 大同洋行が介在し図書館の経費による購入、③昭和4年(1929) 狩野亨吉自身の寄附、である。これを受けて『東北大学五十年史』では、④昭和18年3月に購入した「第二次狩野文庫」を加え、四回の受け入れにより総冊数約10万8千冊に至ったと記す。だが、こうした記述の中に、吉野の名が出ることはなかった。けれども、吉野自身の日記を見るなら、特に第2回納入(大正12年)の際に、彼が関与した様子が窺える。以下、『吉野作造日記』⁷大正12年の記事から関連する箇所を掲げる

2月13日(火)

朝古本、午後学校に行く。渡辺大濤君来訪、狩野先生の内情につき懇談あり(以下略)。

2月17日(土) ※19日記

朝渡辺大濤君に誘はれ狩野亨吉先生を訪ふ 全くの初対面なり 書物処分の件を承る(以下略)

3月25日(日)

(前後略) 新聞を見てから狩野先生を訪ふ

3月26日(火) ※27日記

朝古本屋 昼学校に狩野先生見ゆ 安藤昌益の自然真営道(二千元) 藤岡由蔵日記(二千元) 絵曆(三千元) 曆(千円)を買ふことにする 夜遅くまで目録の調整にかゝる

4月2日(月) ※6日記

石本恵吉君事務所に狩野先生蔵書を見にゆく 長崎武藤長蔵君⁸に遇ふ

4月7日(土) ※8日記

(前後略) 食後岩波君を訪ふ 石本君も来り狩野先生の蔵書売払方法に関し相談す

9月21日(金)

(前後略) …病院に向ふ 途中石本君の大同洋行の店員渡辺大濤君に遇ふ 渡辺君の家族は気仙沼に避難して居ると也 狩野先生の宅に上り込み三十分ばかり話

す やがて十二時を過ぎる

2月13日の記事から名前出てくる渡辺大濤(1879-1958)は、狩野亨吉(1865-1942)に師事した在野の研究者であるが、9月21日の記事を見ると、この頃は大同洋行(社長:石本恵吉)の店員をしていたらしい。明治41年(1908)に京都帝国大学を退官して以来官職に就かなかつた狩野の、会社経営に手を出し負債に苦しみ出すのが大正10年代以降であることを考えると⁹、ここでの「内情」は狩野の経済的困難を指すと考えられる。この年、狩野58歳、渡辺44歳、東京帝国大学教授だった吉野が45歳である。

2月17日に吉野作造が狩野宅を訪れる。「まったくの初対面」であったが、「書物の処分」に協力することになったと見え、吉野自身も安藤昌益『自然真営道』などを購入(し東大に納入)すると共に、書店を営む岩波茂雄や石本恵吉に声をかけ、4月7日には狩野蔵書の売却について相談している。この年は、6月の東北帝国大学への第二次納入に加え、10月に九州帝国大学へも書籍を譲渡するなどしていたため¹⁰、彼らとの連絡は容易かつたことだろう。

翌13年(1924)の『吉野作造日記』にも、狩野関係の記事が多少あるので、参考までに記す。

4月7日(月)

(前後略) 午後^{大カ}大同洋行に石本君を訪ねて狩野先生蔵書販売の残務を談じ夫より社へ行く

9月6日(土)

(前略) 夜渡辺大濤君来る 狩野先生が集めた風刺画帖を持ち込まる 之から思ひ付いて側面観幕末史を読んで見る気になる¹¹

ただし、この後の吉野の日記に狩野亨吉は確認できず、両者の交流がどの程度であったか、想像に任せるのみである。同じく13年の12月31日付吉野書簡(岩波茂雄あて)には、東北帝国大学法文学部の鈴木義男教授¹²からの書籍代に関わる書面をうけて、「年内に狩

7 以下、『吉野作造選集』第14巻日記2(岩波書店、1996年)を底本とする。

8 1881-1942、経済学者。長崎高等商業学校(戦後は長崎大学経済学部)の教授。

9 青江舜二郎『狩野亨吉の生涯』第3編第1章(明治書院、1974年版を一部割愛した中公文庫、1987年版、p.399以下)。

10 相部久美子・梶原瑠衣・山根泰志「狩野亨吉と大西克知」(『九州大学附属図書館研究開発室年報』2015/2016、2016年)。ただし九大への譲渡はこの年に限定したものではない。

11 櫻木章『側面観幕末史』(啓成社、1905年)は「米国艦隊渡来以後に於ける風刺的落書類を主として、社会の一面を観察し、之に一貫の歴史を連絡して記述したる一種の幕末史」(同書凡例)であるため、風刺画帖からの連想が働いたのであろう。

12 1894-1963、法学者・政治家。東北帝国大学法文学部教授。戦後は片山内閣の法務大臣を勤め、東北学院理事長・専修大学長も歴任。鈴木義男伝記刊行会編・刊『鈴木義男』(1964年)参照。

野先生に幾分でも差上げざりしを残念に思ひます」とあり¹³、少なくとも書籍の処分については心を配っていたようである。

大正12年の狩野文庫購入において、吉野作造が果たした役割は、以上から推測される。従来、狩野本人と大同洋行（石本恵吉）が目ざされ、さらに岩波茂雄の関与にも触れられることがあったが、実は吉野作造が、狩野の蔵書売却で重要な役割を果たしていたことも、新たに明らかになったといえる¹⁴。

ところで上記の和書に加え、今回、洋書の購入についても吉野が関与したとの新たな情報が見つかった。すなわち、大正13年5月28日付の河北新報の記事である。

…現在東北大学に収蔵する五万部余の狩野文庫、これは和漢の蒐書で各方面から垂涎されるものだが、これはその当時荒井泰治氏が私費を以て買ひ受け大学に寄附したもので、その後大学の所有になってゐるのである。報恩会で買ひ受けんとしてゐる

のは、狩野家所蔵の洋書約五千部であつて、右は今吉野作造氏の手で東大に買ひ受けさせるべく交渉中だといふが、報恩会の方では東大で若し買ひ受けないとした場合に、これを引受けようとしてゐるので、先方の交渉の成行を今見てゐるのである。価格壱万五千円、東大との交渉が纏まらぬとなれば直に買ひ受けの手続きに出づる筈である。

この記事によると、「狩野家所蔵の洋書約五千部」について、吉野が仲介して東大が購入を検討しているが、それが難航した場合は、齋藤報恩会が購入するという話があったという。この時代の新聞記事は精度にやや難があり、全面的に信じるのは躊躇われるが¹⁵、実際に齋藤報恩会が狩野文庫の洋書を購入したのは前述のとおりである。現時点で、それに吉野が関わったという証拠は得られておらず、引き続き調査を続ける必要がある¹⁶。しかし、吉野が和書購入に関与した点が明らかになったことから、洋書購入時の関与という話もそれなりの根拠はあったことが分かる。

2. 狩野文庫洋書のゆくえ

東北大学附属図書館の狩野文庫には、現在1,520冊程度の洋書が含まれている。これは、4回にわたる狩野文庫和漢書の納入の際に、付随して納入されたものだろうか。あるいは、大正13年に齋藤報恩会が購入した書籍が混ざっているのだろうか。

現存する狩野文庫洋書の全体像については、網羅的調査が乏しく詳細は不明である。しかし図書原簿の調査によると、以下のものが含まれているという¹⁷。

- ①大正元年の第1回納入時：179冊
 - ②昭和4年の第3回納入時（1月14日付）：35冊
 - ③昭和18年の第4回納入時（3月31日付）：1,303冊
- ①は、「荒井泰治からの寄付金で購入」とする捺印が

あることから、年代を推測した。②は寄贈者不明、③は購入額不明で、岩波茂雄（岩波書店）からの納入である。

図書原簿の情報から、現在東北大学附属図書館が所蔵する狩野文庫の洋書は基本的に、和漢書の第1・3・4回目の納入の際に、ともに東北帝国大学蔵書になったと考えられる。一方、大正12年の第2回目の和漢書納入の際に購入された洋書は未見である。さらに大正13年の齋藤報恩会により購入された洋書を、東北大学の狩野文庫では見つけるに至っていない。次に、その点を検証してみたい。

齋藤報恩会発行『事業年報』1（1925年10月）の、

13 『吉野作造選集』別巻 書簡・年譜・著作年表（岩波書店、1997年）p.42。

14 既に渡辺大濤『安藤昌益と自然真嘗道』（木犀社、1930年）p.6に吉野の関与が記されており、同増補版（勤草書房、1970年）p.335、391などに関連する記述があるが、吉野の評伝（田澤晴子2006年、松本三之介2008年）等で触れられた例を知らない。岩波の関与については、前掲『狩野亨吉の生涯』中公文庫、p.441以下に詳しい。吉野は岩波との関係で知られるが、前後の狩野日記の記述を子細に見るなら3月23日に「吉野作造ヨリ電話アリ」、6月22日に「吉野博士を大学に訪ふ」などあり、岩波を介さず、直接狩野とも交渉があった。

15 たとえば河北新報の大正13年5月26日付の記事には、「東北大学の狩野文庫は預託されているだけで、要請があれば返却しなければならぬので、齋藤報恩会の資金で買い取る計画がある」旨が記され、引用した28日付の記事の冒頭で訂正されている。

16 吉野作造が齋藤報恩会をどの程度認識していたか材料が乏しい。管見の限り、吉野日記の昭和2年1月19日条で学校建設敷地の相談をうける際に「齋藤善工門氏の所有」と記されている程度である。

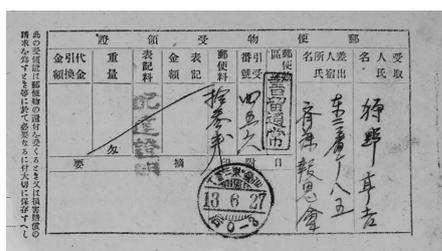
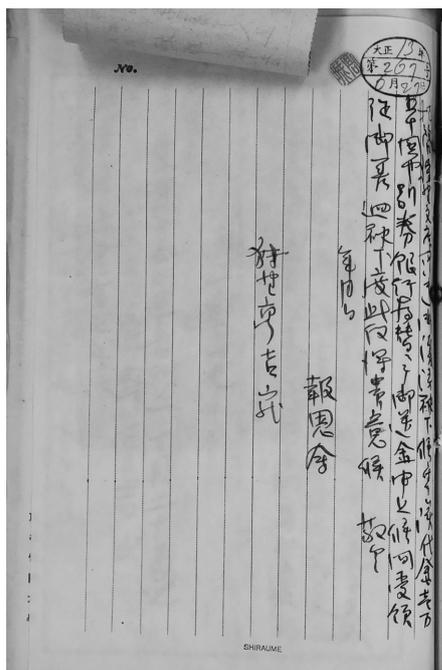
17 東北大学附属図書館情報管理課の回答による。

狩野文庫購入に関する部分は、次のとおりである。

狩野文庫購入／東北帝国大学 林鶴一／右は文学博士狩野亨吉氏の所蔵の洋書を購入せるものにして、将来は齋藤報恩会に蔵してで閲覧に供するものなり。今其の整理の半ばにありて書架及び目録カードを調整中なるが、最早終末に近づけり。

「将来は齋藤報恩会に蔵して」という箇所からは、購入はしても東北帝国大学の所蔵にはしないという意志が感じられる。その点を検証するため、関係する齋藤報恩会資料を点検したい。

今回の展示に際し調査を実施できた『大正13年度執務文書』には、いくつかの関連資料が含まれている。4点を示す(A～D)。



関連資料 A および添付されていた郵便物受領証

(A：6月27日発送¹⁸)

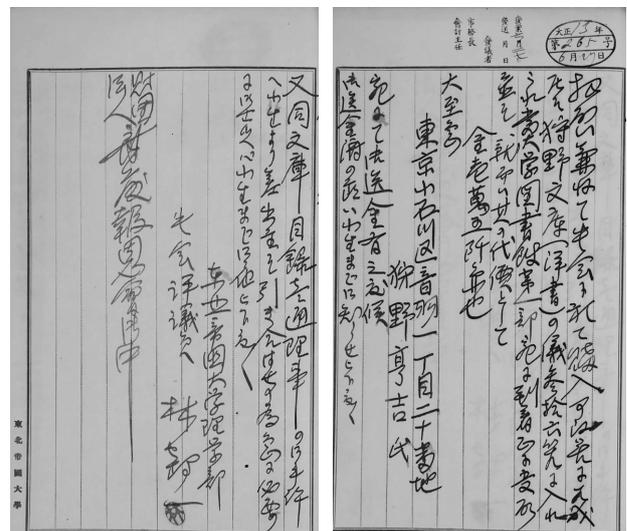
拝啓 狩野文庫（洋書）御譲渡被下候ニ付テハ渡代金壹万五千円也、別券銀行振替ニテ御送金申上候間、受領証御差廻被下度、此段得貴意候、敬具

年月日 報恩会
狩野亨吉宛

(B：6月27日発案)

拝啓 兼ねて貴会に於て購入可致筈に相成居候狩野文庫（洋書）の儀、参拾六箱に入れ、これ当大学図書館第一部宛に到着、正に受取置候、就而ハ其の代価として／金壹萬五仟円也／大至急／東京小石川区音羽一丁目二十番地／狩野亨吉氏／宛にて御送金有之度候、御送金済の段ハ小生まで御知らせ被下度候、又同文庫目録表通理事の御手許へ小生より差出置も、引き合はせの為急に必要に御座候へバ小生まで御届被下度候、

東北帝国大学理学部／貴会評議員
林 鶴一
財団法人 齋藤報恩会御中



関連資料 B

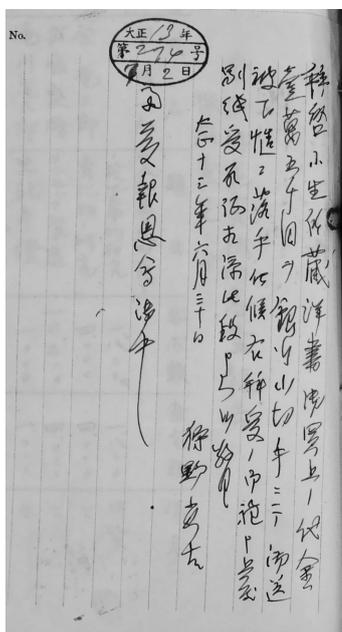
(C：7月2日到着)

拝啓 小生所蔵洋書御買上ノ代金壹萬五千円ヲ銀行小切手ニテ御送被下候ニ落手仕候、右拝受ノ御礼申上度、別紙受取認相添此段申上候、敬具

大正十三年六月三十日

18 本書簡の写しは日付を欠くが、添付された送金の受領書が6月27日付である。

狩野亨吉
齋藤報恩会御中



関連資料 C

(D: 12月18日付)

拝啓 附属図書館第一部に於て依託を受け調査中

の狩野洋書文庫整理に付、入用にて購入致置候ハバ、封中請求書の通り支払すへき旨、齋藤報恩会へ御提示被下度候、年末の事ゆえ可成早く支払ふ様、御手続被成下度候、以上

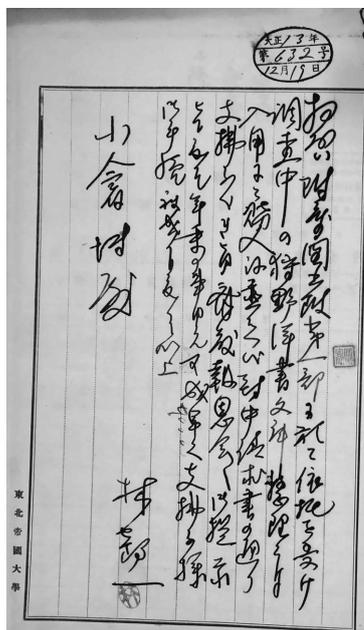
林鶴一

小倉博殿

この狩野文庫洋書は、大正13年(1924)5月24日の評議員会において、年度ごとの「学術研究補助」とは別枠で、購入が決定している¹⁹。異例な購入の経緯に、吉野作造が関係しているか否か(前述の河北新報記事)不明である。当時東北大学附属図書館の館長職にあった林鶴一が申請者となり、購入手続きが進められた。Aは、購入する洋書の代金1万5千円について、報恩会から送金したことを通知する内容から、狩野亨吉宛に発送された書簡の控えであると考えられる。Bは狩野から送られた書籍が到着したことを報せる内容で、林鶴一から齋藤報恩会に送られた書簡の写しである。狩野から36箱の書籍が東北帝国大学附属図書館の第一部²⁰に到着したので、すみやかに狩野に代金を送ることを依頼し、あわせて一度理事に届けた目録について整理のため林まで戻すことを要望している。Cは、代金の1万5千円を受領したとの、狩野からの連絡である。

さて、興味深いのはDである。ここで林館長は、齋藤報恩会の事務を担当していた小倉博²¹に対し、書籍整理のための必要経費を請求している。その際に「附属図書館第一部に於て依託を受け調査中」という表現を使っており、あくまでこの洋書群は齋藤報恩会の所有であり、図書館は委託されていると記す。

齋藤報恩会の学術研究助成金によって購入された書籍は、東北帝国大学の教員が申請したものについては、東北帝国大学附属図書館に納入されるのが通例であったように見える。書籍購入の名目で助成金をうけたヴェント文庫、スタイン文庫などは勿論、研究助成の一環として購入されたチーテルマン文庫、西蔵大蔵経や『臨顧愷之女史箴図巻』など²²についても同様であった。それに対し、この狩野文庫洋書については、むしろ前出の「将来は齋藤報恩会に蔵して」を裏付けるような



関連資料 D

- 19 前掲の米澤晋彦・吉葉恭行「財団法人による研究助成の実際—戦前の齋藤報恩会を事例として—」p.23-24。
- 20 大正11年の法文学部設置に向けて、東北帝国大学附属図書館は第一部(理・工学部と金属材料研究所蔵図書を担当)と第二部(法文学部の図書を担当)に分かれ、同14年頃まで二部制が続いた。
- 21 当初は東北帝国大学の事務官として齋藤報恩会の事務を担当し、大正15年以降は報恩会の専任事務職員となった。
- 22 研究題目は順番に「民法の歴史的比較的研究」(栗生武夫・石田文次郎)、「西蔵仏典の研究」(宇井伯寿・鈴木宗忠・金倉円照)、「欧州に集蔵せる東洋美術の研究」(福井利吉郎)。

整理の様子が感じられる。狩野文庫洋書は、東北帝国大学には納入されず、斎藤報恩会が保管していたのではないだろうか。

実はその点について、先行研究に指摘があった。1992年時点で仙台市史編纂室嘱託を勤めていた明石治郎氏の調査報告²³には、「……大学ノートに手書きされた昭和21年3月現在の斎藤報恩会博物館図書部の図書目録のなかに〔狩野文庫中ノ日本関係ノ文献〕というリストがあることがわかり、改めて書庫を調べてみた結果、それに符号する書籍の一群を見つけ出すことができた」とあり、斎藤報恩会が狩野旧蔵洋書を所蔵していたことが確認されていた。さらに明石氏は、斎藤報恩会所蔵図書の多くが昭和20年の戦災により焼失し、疎開していた一部（前谷地斎藤家および白石片倉家）のみ、戦後仙台市内に運び戻されリストが作られたことも明らかにし、当時現存していた斎藤報恩会所蔵の狩野文庫洋書のリスト（137点）を作成している。

以上からおそらく、次の経緯が推測される。林鶴一が申請し大正13年に斎藤報恩会が購入した狩野文庫洋書1万5千円分は、東北帝国大学附属図書館にいったん届けられ整理されたが、その後は納入されず、仙台市本町の斎藤報恩会で保管された。昭和20年の戦災前に一部が疎開したが、大半は仙台に残され空襲などにより焼失した。残された130点余の狩野文庫洋書は、疎開先から仙台に戻され、1992年時点では存在が確認されたが、2009年の市内本町から大町への移転、2011年の東日本大震災時の被災、2015年の斎藤報恩会の解散などによって、跡をたどれないのが現状である。

なお明石氏が紹介する前述の「報恩会手書き目録」の記述には、「焼失前の蔵書の全目録は図書と共に焼失したるを以て其書名冊数価値等凡て知るよしなし」と

ある。大正13年に報恩会が購入した狩野文庫洋書の全体像は、今となっては不明というのであるが、ここに一つ検討材料がある。

東北大学附属図書館の図書情報係で遡及入力の際に、“Catalogue of books in the library of Saito Gratitude Foundation”という洋書の存在が確認された²⁴。表紙に「斎藤報恩会所蔵圖書目録／（狩野文庫之一部）」と記され、見返し部分に昭和9年9月27日の受入印が捺されている。同書に収録されている書名は総数が3千700を超える。東北大学附属図書館に現存する狩野文庫洋書とは重複しない様子で、後半鉛筆による記号（○×△）などの書き込みがある。

今後の調査を待たないと断言はできないが、1992年明石氏作成リスト記載の137点は、ほぼ本カタログに掲載されている（主に‘BOOKS ON JAPAN’142点の内）ことから、本カタログが斎藤報恩会が保管していた狩野文庫洋書のリストである可能性は高いと思われる。ただし表紙の「（狩野文庫之）一部」の文字を受け止めるなら²⁵、大正13年に1万5千円分で斎藤報恩会に購入された狩野文庫洋書の全体像（書名等）が復元できるか否かは、なお今後の課題である。

〈付記〉

①引用文の漢字は通行の字体とした。改行を／で表示した箇所がある。

②本稿作成の過程で、多くの方々にお世話になりました。特に、佐藤弘幸（吉野作造記念館）、菅野正道（仙台市博物館）の両氏には、貴重な情報を頂きました。また東北大学附属図書館の関係部署の各位にも御多忙の中、各種の御教示を賜りました。厚く御礼申し上げます。

23 明石治郎「斎藤報恩会の学術研究助成—その一端の紹介、特に中井新三郎関係史料と狩野文庫について—」（『市史せんだい』1, 1992年）。

24 IA1/S25。書名はタイトルページから。

25 前述の河北新報の記事の中に「約五千部」とあるが、仮にその数字を信用するとしても、“Catalogue of books in the library of Saito Gratitude Foundation”に記載される3,748タイトルとの関係は未詳である。